

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター
http://www.kwansei.ac.jp/RCC/index.html TEL:0798-54-6019

キャンパスの中のキリスト教シンボル(その7)

レビヤタン

神学部助教授
土井 健 司



煙草を断つて15年ほどになるが、これまで一度も吸いたくはない。禁煙という悲壮なものではなく、自然と吸いたくなくなっただけである。それでも、旨そうに煙を出す人を見かけると、ちよっぴり羨ましくなることもある。

神学部の喫煙所は、学部側面の出入り口付近にある。学期中そこを通りかかると、学生が喫煙しているのをたびたび見かける。あるとき学生に教えてもらったのだが、その扉の上段には彫り物があった。よく見ると、なにやら怪物らしきものが石の上に彫ってある。瞬間「あ、レビヤタンだ」と閃いた。旧約聖書に出てくる「竜」のことである。たとえはイギリスの思想家ホッ

プスの著書の題名「リバイアサン」はこのレビヤタンの英語読みである。日本で竜と言えは、たとえば「龍神さま」のように神さまの二つに数えられる。しかし、聖書の世界ではしばしば悪の化身だ。黙示録を見ればたまたまわかる。レビヤタンもその一つで、詩編74編やヨブ記などに登場する。中でもヨブ記41章にはその姿が記述されている。たゞは「口からは火炎が噴き出し、火の粉が飛び散る。煮えたぎる鍋の勢いで、鼻からは煙が吹き出る」とある。さらにその強さについて「剣も槍も、投げ槍も、彼を突き刺すことは出来ない。鉄の武器も麦藁となり、青銅も腐った木となる」と書く。まったく恐ろしい怪物である。

一体なぜ神学部の建物にそのような怪物が彫られているのか。神学部にはレビヤタンが潜んでいるということがある。それとも魔除けのつもりか。いずれにしても、火炎を噴き出すレビヤタンの像は、喫煙所としくくり合っているように思った。とはいえ、吸い過ぎと火にはご用心を。

研究プロジェクト ＜聖典と今日の課題＞

RCC研究員・神学部教授 水野 隆 一

代社会にそのまま実践しようとしている様子が、メディアなどを通じて、報道されています。それらの聖典は、古代に書かれた特定の社会・文化状況に影響されたその価値観・世界観を反映した文書であるにもかかわらず、時代や地域を越える普遍的な価値を持つと信じられてきたために、時空を超越した「ワーブル」的な結びつけが行われているのです。

聖典と今日の課題プロジェクトは、今もなお様々な領域で影響力を持ち続ける聖典の解釈を見直し、検討することを目的としています。さらには、キリスト教と文化研究センター全体の研究目的でもある、暴力の克服や平和のための戦略構築に寄与する研究となることを目指しています。

現在は、聖書学(旧約聖書、新約聖書)の研究員(宗教主事、神学部教員)によって共同研究が行われています。春学期には、聖書の研究・解釈方法をめぐっての研究会が二回開かれました。今後は、キリスト教の歴史や他の聖典の研究も加えて、より広い見地からの研究プロジェクトとすることを計画しています。

RCC主任研究員
経済学部助教授
舟木 讓

編集後記

今年度第二号、通算八号目のニューズレターをお届けします。今年三月末でRCC初代の専任教員であり、RCC草創期の牽引役であった前島宗甫元教授が定年退職を迎えました。大きな働きを送り出す不安の中にも、今年三月末で、今回の一頁を担当してくださった樋口進教授を二代目の専任教員として与えられ、主任研究員をはじめ、心強く新たな船出を始めてはや八ヶ月を迎えようとしております。

また、恒例のシリーズ「キャンパスの中のキリスト教シンボル」の執筆もこの四月に玉川大学から神学部へ赴任された土井健司助教授に担当していただきました。さらに今紹介した新たな研究プロジェクト「聖典と今日の課題」もすでに発足し研究会を重ねております。その研究成果は総合コース等でお伝え出来ると思います。今年度、キリスト教関連の新しいスタンプが与えられ、これまでも増して様々な試みをRCCが始めていることをどうぞ、お覚え下さい。

混沌とした現代社会の問題に キリスト教の立場から提言を

RCC教授・センター副長 樋口 進



二〇〇五年四月より、キリスト教と文化研究センター教授・センター副長として就任いたしました樋口進です。よろしくお願いたします。私は、関西学院大学神学部大学院を卒業し、約三〇年間日本基督教団の教会で牧師として働いてきました。その間十数年間、関西学院大学神学部大学院で非常勤講師として旧約学の授業も担当してきました。さてこのたび、センター副長という職に任じられました。が、まだこのセンターの活動を全体を充分には把握できていないのが実情です。

このセンターは、一九九七年四月の発足ということですから、十年足らずの歩みですが、今までの報告を見ますと実に豊かな成果を上げていくことを評価したいと思います。フォーラムにおいては、現代の重要な問題である生命倫理、エコロジー、人権、平和といったテーマのもとに適切な講師による貴重な講演がなされ、また書物としてその成果が公表されてきました。また、研究員による地道な研究が続けられており、それらは雑誌『関西学院大学キリスト教と文化研究』に掲載されてきました。さて、このような豊かな成果が生み出されたのは、本センターの「現代社会が直面する諸問題とキリスト教とのダイナミックな折衝を、学術的に探求する」という設立理念

に基づいているからだと思えます。キリスト教主義大学にこのようなセンターが設立された意義は非常に大きいと思えます。

平和で豊かな世界になると期待された二一世紀は、紛争や対立、環境汚染、凶悪な犯罪など世界全体が混沌とした様相を呈しています。日本においても、平和憲法に抵触するような自衛隊のイラク派兵が断行され、その平和憲法も改悪が計画され、再び戦争の危険が迫るに逆戻りしつつあり、大いに危惧を感じます。また、地球温暖化など地球の環境もだんだん悪くなり、自然の災害も強大化しているように思えます。人間の自己中心的な罪を感じます。

そのような中であって、キリスト教の立場から、平和や環境の問題に対して、特に学術的に提言していくことは重要だと考えます。その意味で、当センターに課せられている課題は大きいと思えます。

現在当センターでは引き続き「平和」の問題をテーマとしていろいろなフォーラムを計画しています。日本の一部の知識人の間で、イスラーム教やユダヤ教やキリスト教は一神教なので他に対して不寛容であり、戦争ばかりしているが、東洋のような多神教の世界は寛容であって平和だ、というようなことを主張している人がいます。このような意見にたいして、キリスト教における「平和思想」や「反暴力思想」などを主張していく必要があると思えます。そのとき、聖書をどう解釈するかが問題となります。為政者は、聖典を引き合いに出して自分たちの攻撃や主張を正当化する傾向にあります(ブッシュ大統領は、しばしば聖書を引用します)。聖典解釈ということが現代の一つの課題です。当センターでは、今年度より「聖典と今日の課題」という研究プロジェクトを立ち上げましたが、これもよい成果が出ることを願っています。当センターの働きについて皆様のご支援をお願いいたします。

第二十九回RCCフォーラム講演抄(二〇〇五年六月二十八日)

敵意の中垣を超えて

——国連体制に欠けるもの——

国際基督教大学教授
最上敏樹

霧の中の平和

ギリシヤの映画監督、テオ・アングロプロスの最新作『エレニの旅』は、故郷を追われ、息子たちを戦争にとられ、最後は夫も戦争で失う女性の物語である。凄絶な時の流れの中でも人々が諦めずに歩み続けるという、アングロプロスの変わらぬテーマが、詩のように美しい画面とともに展開されていく。評論家の加藤周一氏はこの映画について、「霧の中の世界に生き、かつ死ぬほかない人間の宿命を、優しく、いたわるように示すもの」と評した。

同時にそれは、非平和の普遍性を描いたものでもある。過酷な運命に翻弄されるエレニを通して、平和を喪い平和を求める人々の物語が、簡単には語れない。



問題点が加わった。「不正義」や「悪」の指定を独占しようとする国が現れたことである。それこそが、「単独行動主義」の最も深い意味にほかならない。そこにおいては、秩序が強化されるのではなく、むしろ不安定さが増す。

現代世界における「正義」のあやうさ

冷戦終焉後、それに勝利した唯一超大国の描く秩序にはむかう者が「悪」だということになってきた。それは恣意的になりやすいだけでなく、他者への強制であるから、「支配」される側の中に反抗の種もばらまく。またそれこそが、冷戦後の世界が暴力性を高めたことの一つの原因でもあった。つまり、そうして強制される側が「テロ行為」をぶつけ、いわゆる「テロ行為」など、破壊的手段をとることも辞さなくなるからである。そしてそういう集団が「悪」だとされ正義の名において抑圧される。

正義というものは、必要だが困難なもの典型である。必要な「正義」とは、人がみずからの責任なくして苦難をこうむらないことである。たとえば、賛成していない戦争で殺される人々や、学校に行きたいのに義務教育

普遍的平和と国連体制

平和をつくるために国連が採用したのは集団安全保障という方式だった。多国籍主義に立脚し、国々の個別の武力行使に代えて国連が力の行使をするという方式である。個別に武力行使をする方式よりは上等だが、問題もある。この体制は不正義(悪)を処罰する体制だが、すべての

平和をつくるために国連が採用したのは集団安全保障という方式だった。多国籍主義に立脚し、国々の個別の武力行使に代えて国連が力の行使をするという方式である。個別に武力行使をする方式よりは上等だが、問題もある。この体制は不正義(悪)を処罰する体制だが、すべての

占領と抵抗の悲劇がそこに集約的にあるからである。

この問題の長い歴史は省略するが、最小限、この紛争が「テロをする側」と「テロとたたかう側」という単純な図式では説明できないことは理解しておかななくてはならない。いずれの側も悲惨な点では共通しているのである。

最終的な解決方法としては、まずはパレスチナ国家の建設を認め、すでにあるイスラエルとの平和共存体制をつくる以外にないだろう。それは境界を設定することだが、「接触」を妨げるような壁を作ることとは明らかに違う。むしろ、二つの民族の間の憎しみをあるような「目に見えない境界」はすでに存在しているのだから、それを壊す



ためにこそ国境という法的な境界を設定する、と言わなければならない。ところがそこにまた別の問題が起きた。二〇〇二年から、イスラエルがヨルダン川西岸の占領地域を包み込む分離壁を建設しはじめたことである。これに對しては国際司法裁判所も、「分離壁」が国際法に違反するものであり、撤去しなければならない、という勧告的意見を示した。この壁は、ただの国境とは明らかに違う。人々の「接触」を断ち切り、憎しみを強め、平和を更に遠ざけてしまう境界線なのである。同じような壁が、第二次世界大戦前、ポーランドのワルシャワなどいくつもの市で、ユダヤ人を囲い込むための地区(ゲトト)において建設されたのだった。二十一世紀になつたいま、それを反転したような光景がパレスチナでくり広げられる。それは、悲惨の受け渡しとしか言いようがない。

パレスチナ出身の学者、エドワード・サイードは、その著『知識人とは何か』において、知識人の役割を「特定の人種や民族がこつむつた苦難を、人類全体にかかわるものとみなし、みずからの苦難と他の人々の苦難とを関係づける」ことだとしている。平和のためには「他者」への想像力が不可欠だということ

である。

イスラエルにも、そういう普遍的視点を保つことのできる人がいる。その一人、ジャーナリストのアミフ・ハスは、著書『パレスチナから報告します』において、「自分はホロコーストを生き延びた者として、あらゆる抑圧に反対する。だから自国が占領していることにも反対するのだ」と述べている。面白いのは、ハスがそういう考え方を取る理由について、「自分は左派だから」と述べていることである。「左派」とは彼女によれば、「ヒューマンであること」、すなわち人間存在の根源的な価値を重んずることを意味する。

平和のための想像力: 理性的・共感的であること

いまこつむつた状況の中で平和について語るにはどういった意味があるのか。それは、非平和状況の中で反知性主義がはびこることが耐えがたく、また危険だからである。マッカーシズムのころのアメリカがまさにそうだった。深く考えずに付和雷同する市民があつたという間に多数を占めたのである。アメリカだけではない。日本も同様で、たとえば丸山眞男教授は、日本では「時勢主義」がはびこりや

分だけの正義ではなく、「他者」との正義」を求めることが重要だということである。あるいは共感(compassion)を高め、異質な他者への寛容を強めること、と言つてもよい。

敵意の中垣を超えて

最後に今日の話に関連する聖書の箇所に触れたい。エペソ人への手紙(エペソの信徒への手紙)二章十四、十六節で、そこには「キリストは私たちの平和であつて、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまつたのである」(口語訳)とある。

それこそが平和なのではないか。敵意の中垣を超えることが肝要なのではないか。指導的な国のいくつかがみずからの正義に酔い、他者に懲罰を重ねているうちに、世界は平和になるのではなく、より不安定化してしまつた。それをどう軌道修正するか―それを突き詰めて考えることが現在の課題である。国連を改革するというときにも、その点をただすことの大切さを見失つてはならない。